



育てる者の喜びと淋しさ

山下 俊郎

いままでに、わたくしは二つの幼稚園の園長と一つの保育園の園長を数年つとめたことがある。卒業式のことを話題にするには少しはや過ぎるようであるが、卒業式の度にわたくしが強く感じたことがある。卒業する子ども達は、まことにうれしそうで、やがて入学する小学校の生活としての楽しい夢に胸をふくらませている。そしていよいよお帰りとときには、いともいそいそとして、「センセイ、さよなら」「エンチョセンセイ、さよなら」といつてはねながら帰つて行く。しかし、あとに残される先生たちは泣きの涙である。「○○ちゃん、学校のお兄さんになつてもまた幼稚園に遊びにいらつしやいね」と、子ども達の頭をなで、しつかりと抱きしめて、「さよなら」をいつたあと、どの先生も眼を泣きはらしてま

かにしている。そしてそれをながめているお母さん方も眼をうるましている。卒業式というものは、先生にとつてうれいものであると同時に悲しいものである。「○○ちゃん、おめでとう」といながら眼をうるませている。育てられるものは、どんどん育つて、やがて育てる者の懐をはなれて行く。よくもこれまで育つてくれた！という喜びは、やがて自らあとに残される淋しさなのである。

「子ども達に自立の心を」ということは、この二十年來、わたくしがおよそ子どもの教育に關することについて発言し、誓く場合に、いつでも唱えて来たことである。

しかし、自立が子どもの身につけて行くにつれて、それだけ余計に子どもの身体も心も育てる者のそばを離れて行く。

ひとを愛するということ、そのひとを奪うことだといつた人がある。子どもを育てるといふことは、その子どもをやがては自分の手のとどかない所へと離してやることだといつてもいいであらう。

子どもには、子どもとしての生活がある。子どもはどこまでもその子どもとしての道を歩かなければならない。これが子どもの自立である。

○ 青年期の子どもを持つた母親から、よくわたくし達は子どもが友達と遊ぶことにはかり夢中になつていて、さつぱり家にいない、小さいうちはよく「お母さん！お母さん！」といつて自分のそばばかりにいて、ついこの間までわたしをよくいたわつてくれたのといつて訟えられることがある。いつまでも母親にはかりまわりついでいる子どもは、順調な成長をしているとはいえない。精神的離乳がおくれているからである。だから、わたくしは、子どもが自分のことをさつぱり問題にしてくれないとなげくお母さんには、それが人間としての順調な成長の道なのですと話している。

○ 成長というのは、いままでの幼ない殻をぬけ出して、新しい世界へと進んで行くことである。保護していくれた殻は、保護されている間は誠に有難いものである。しかしこれからぬけ出して行く時には、そしてぬけ出してしまつてからは、邪魔であり、有難くないものである。そしてその有難さは、心の奥には残つても、それはやがて思い出される有難さであつて、現実の生活ではまことうるさいものになつてくる。

育てる者は、育てられる者から見れば、この殻のよう

なものである。それは、育てる者の宿命である。

○ 幼児保育者もまた必然的に育てる者の楽しさと淋しさを味うべき宿命を持つている。ひとりひとりの幼児を心をこめてみつめ、それぞれの幼児の成長に心をくたく保育者で、その育ての心が強く暖かであればあるほど、楽しみは大きい。そしてまたやがてその子が自らの道を一步ふみ出すときにはそれだけに淋しい。

○ しかし、大きい心を持つた保育者のほんとの喜びは、自分の懐からとび出して行くものの後姿に、この上ない頼もしさを感じる所に在る。育ち行く姿こそ、育てるものにとつての無上の喜びである。

○ 育てた者が、巢立つて行くことを思うとき、誰でもが感じるうれしさと淋しさ、それはやはり育てる者の宿命である。そしてそれを大きい喜びに包み得る者が、ほんとの育ての心を持つたものといひ得るのである。